

戦前期日本における海外移民の社会構成に関する一考察—山口県を事例として

木村健二

本稿は、近代日本の移民事象に関して、どのような地域からどのような人々が、どのような経緯で海外に移動していったのかを解明することを課題とする。考察の結果、村落内の階層構成については、明治前半期の朝鮮行の場合は全階層的進出であり、ハワイ官約移民では第1回は上層が多かったが、2回目以降は下層や最下層も多かったこと、北海道・ハワイ私約移民・東拓移民・ブラジル移民は中層を中心として共通性を示しつつハワイ私約移民における上層の存在、北海道・ブラジル移民における最下層の存在などが資金的事情とあいまって特徴として指摘できた。また家族内の地位については、出稼移民のケースでは当初は戸主・長男層が多かったが徐々に二男以下層も増加し、農業経営移民の場合も戸主層から二男以下層へ波及していったことが明らかとなった。そしてこれらの移民送出に際しては、私約移民の場合を除いて国家的バックアップがなされたことも特徴であった。